

2022年

地域連携年報

第九号

滋賀短期大学
地域連携教育
研究センター

SHIGA JUNIOR COLLEGE
COLLABORATIVE
RESEARCH & COMMUNITY
COOPERATION CENTER



目次

1. 地域連携教育研究センターの体制	1
2. 調査研究プロジェクト	
(1) 高大連携を視野に入れたメンタルヘルスケアを必要とする大学生への支援の可能性	笹倉千佳弘… 2
(2) 算数教育における児童の思考の流れに視点をおいた授業改善プロジェクト	久米 央也… 3
(3) 介助付き旅行経験の共有によるユニバーサルツーリズムの推進	江見 和明… 4
(4) 地域支援活動を広げるSTEAM教育 ～モンテッソーリ教育実践の繋がりのなかから～	保田 恵莉… 5
3. 地域との連携による教育研究活動	
(1) ひらのまつり2022	北川 志信・久保 晶路… 6
(2) ヘキセンハウスの制作	北川 志信・久保 晶路… 7
4. 地域に向けた公開講座	
(1) 守山すみれ講座	
1) 楽しく作れるお菓子	石井 明… 8
2) ウエーブストレッチ	附属高等学校 副校長 木村 順子… 9
3) からだと病気のしくみ	田中 裕之… 10
4) 身体で感じ、身体で表す ～幼児期における感性の育みを促す<身体・造形・音楽>の融合的表現～	北尾 岳夫・深尾 秀一・柚木たまみ・三上 佳子 奈良教育大学 教授 竹内 晋平… 11
5) 街道と宿場町	学長 秋山 元秀… 12
(2) 公開講座	
1) 子どもプログラミング教室	附属高等学校 教諭 杉本 侃哉… 13
2) お菓子の講座	石井 明… 14
5. 大学及び自治体との連携事業	
(1) 地域移動講座	
1) 地域移動講座 in 長浜	松村 都子… 15
2) 地域移動講座 in 大津	松村 都子… 16

6. 高大連携事業

- (1) 滋賀県教育委員会の連続講座……………17
- (2) 滋賀県等の高等学校への出前授業……………17
- (3) 大学見学受け入れ時の講座……………18

○資料

- 新聞などに掲載された記事（令和4年1月～12月まで）……………20
-

1. 地域連携教育研究センターの体制

1. 目的

地域連携教育研究センターは、本学の研究活動の向上に関わる支援とともに、地域連携に関わる教育研究の推進等を目的とする。

2. 実施体制

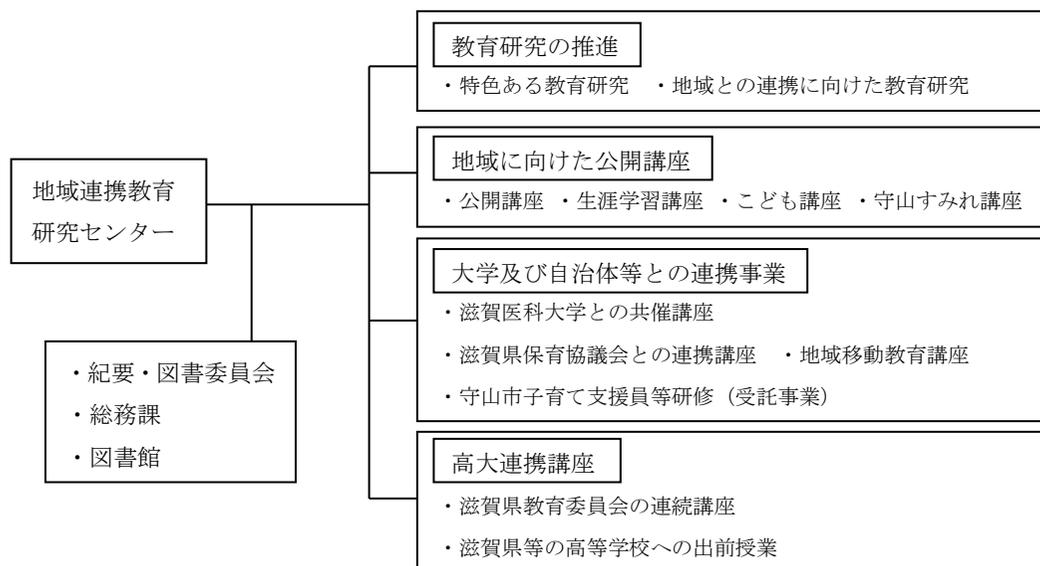
(1) 実施組織について

地域連携教育研究センターは、上記の目的を達成するため、センター長、地域連携教育研究センター員、総務課及び図書館職員によって組織される。

地域連携教育研究センターの構成（2022年度）

氏名	所属・職名
深尾 秀一	幼児教育保育教授・センター長
豊岡 真莉	生活学科特任助教
永久 欣也	幼児教育保育学科特任教授
田中 裕之	ビジネスコミュニケーション学科教授
松村 都子	地域連携教育研究センター准教授
中野 英樹	事務局長
太田美穂子	事務局次長兼総務課長
山本眞砂子	総務課係長兼地域連携教育研究センター係長

(2) 実施体制図



2. 調査研究プロジェクト

(1) 高大連携を視野に入れたメンタルヘルスケアを必要とする大学生への支援の可能性

生活学科 笹倉千佳弘

1. はじめに

本調査研究の目的は、通信制課程を設置している高等学校における、メンタルヘルスケアを必要とする生徒へのかかわりの検討をとおして、高大連携の観点から、短期大学におけるメンタルヘルスケアを必要とする学生に求められる支援の可能性を明らかにすることである。

2. 活動内容

2-1. 予備調査

A 高等学校（私立）の教育活動に関する聞き取り調査、および授業の参与観察を実施した（2021年11月17日）。また同校出身の本学学生への聞き取り調査を実施した（2021年12月10日）。

2-2. 本調査（1）

メンタルヘルスケアの実践例として、山本昌知（精神科医、『人薬』藤原書店、『ひとなるーちがう・かかわる・かわるー』藤原書店）への聞き取り調査、および同医師が主催する「愚痴庵」（おもに精神障害者が集まる居場所）への参与観察を実施した（2022年6月18日、2022年7月3日、2022年8月21日、2022年10月23日）。

2-3. 本調査（2）

滋賀県内で通信制課程を設置している高等学校を訪問し、次の3点を中心に聞き取り調査を実施した。①メンタルヘルスケアを必要とする生徒の様子（学校および家庭）、②メンタルヘルスケアを必要とする生徒への支援、③メンタルヘルスケアを必要とする生徒・学生をめぐる高大連携の可能性。実施日は次のとおりである。A 高等学校（私立、2022年12月2日）、B 高等学校（公立、2023年2月10日）、C 高等学校（私立、2023年2月27日）、D 高等学校（私立、2023年2月28日）。

3. 総括

本調査の（1）と（2）から得られた知見を述べる。本調査（1）からは、どのような支援をするのかを決める際、①当事者の声を尊重する、②当事者の困りごとの背景まで視野に入れる、という2点の重要性が明らかになった。短期大学は教育研究機関であるため自ずと限界はあるが、本学が新入生に実施しているクラス（ゼミ）担当者による個人面談は、①と②に有効であると考えられる。

本調査（2）からは、メンタルヘルスケアを必要とする生徒にかかわる際、それぞれの生徒に関する蓄積された情報を、①育ちの連続性の観点から中学校から引き継いだ情報も加えて、②個別の教育支援計画、あるいはそれに準じた形で整理することの重要性が明らかになった。本学の立場からすれば、高等学校で作成された個別の支援教育計画の入手が喫緊の課題である。今回、調査を実施したすべての高等学校は、当事者と保護者の同意があれば、本学への情報提供は可能である。

(2) 算数教育における児童の思考の流れに視点をおいた授業改善プロジェクト

幼児教育保育学科 久米 央也

1. はじめに

2020年度から完全実施の学習指導要領では、3つの資質能力が明示され、それらを育むために「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善に取り組むよう謳われている。共同研究をする日野町立日野小学校では、「主体的・対話的で深い学び」の実現と「読み解く力の育成」を目指した校内研究に取り組んでいる。「算数教育における児童の思考の流れに視点をおいた授業改善」について、「児童のつまずき」とその対応について共同で授業を分析し、「わかる・できる・楽しい」が実感できる授業改善のあり方について研究していく。

2. 活動内容

算数授業における児童の思考の流れに注目し、つまずきのみとりと手立て、さらに意欲的に取り組むための手立てについて、授業研究に取り組んだ。日野小学校による授業実践記録をもとに「主体的・対話的で深い学び」および「読み解く力の育成」の実現に向け、児童の思考の流れをキーワードに「つまずきとその対応」について研究を共同で進めた。さらに、現場において実践記録をもとに考察し、研究成果物を作成した。具体的には、児童の思考の流れには、それぞれの場面につまずきが見られ、そのつまずきをパターン化し分類をした。児童のつまずきは10にパターン化され、それぞれに応じた適切な手立てを講じることで、児童のつまずきを軽減できることが分かった。

算数授業でつまずく10のパターン

- (1) 問題との出会いで、問題そのものが読み取れない。(イメージできない)
- (2) 課題は読み取れても、どうせできないとあきらめてしまう。
- (3) 課題に取り組もうとするが、やり方がわからず見通しが持てない。
- (4) 自立解決に向かうときに、過去の学びが不十分なため、既習の学びを活用できない。
- (5) 抽象的な思考ができず具体物がないと考えられない。
- (6) 課題解決のアイデアが浮かんでも、図や言葉で表現できない。
- (7) 自分の解決のアイデアを他者に説明できない。
- (8) 他者のアイデアの説明を聞いても、読み解くことができない。
- (9) その時はわかっても、適応問題でつまずく。
- (10) 振り返りがしっかりとできない。

3. 総括

小学校授業でのつまずきについて、授業から分析しその手立てを実践した。今後は幼児教育とも連携し小学校でのつまずきを幼児期から事前に防ぐ手立てを考えていきたい。

なお、本研究は令和4年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

(3) 介助付き旅行経験の共有によるユニバーサルツーリズムの推進

ビジネスコミュニケーション学科 江見 和明

1. はじめに

筆者は、令和3年度において、近畿日本ツーリストの伴流高志氏の協力を得て、滋賀県で地域トラベルサポーター養成講座を実施することを計画したが、コロナ禍の影響で実施することができなかった。それに替わる取り組みとして、オンラインでも学べる研修動画を撮影することにした。これは、障害のある方の協力を得て、日帰り旅行の始まりから、電車、バス、タクシーなどを乗り継いで、目的地までの行程で、介助の様々なポイントを解説する内容である。今年度は、その続編として、これまで伴流氏が企画したツアーに参加したことのある方々にインタビューを行い、病気や障害を抱えながらも旅行に行くようになった経緯や旅行に参加してよかったことなどについて語ってもらい、映像に記録した。

2. 活動内容

本取組みでは、近畿日本ツーリストが実施している「バリアフリー旅仲間 バリアフリー四国お遍路・高知県 5日間」というツアーに同行させていただいた。特にインタビューという堅苦しい形式ではなく、旅行の合間や食事の際に、自然な形でお話を伺った。お話を伺ったのは、次の3人の方である。Aさん、男性70代（埼玉）脳出血で半身麻痺、歩行は不可、奥様と参加、Bさん、男性70代（愛知）、脳梗塞で半身麻痺、補講は若干可能、奥様と参加、Cさん、女性70代（大阪）脳性麻痺で車いす生活、歩行はつかまり立ち程度、担当介護士Dさんと参加。

インタビューで3人に共通するキーワードは、「旅行仲間との交流」であった。Aさん（奥様）「他の参加者の人は皆、元気で明るい。一緒に行くとパワーがもらえる。本人も元気になる。旅行に行くためにリハビリを頑張るようになった。仲間ができたことが励みになる。」Bさん（奥様）「ツアーに参加してみたら、参加者の皆さんが笑顔で温かく迎えてくれて、とても嬉しかった。皆さん病気を抱えていることが共通点で、色々な話をしているうちに距離が縮まっていった。」と話している。Cさん「(人との) つながりを持つという感じで、朝日新聞社の募集したツアーがあつて、そこで友達をみつけた。」とのことだった。病気や障害を抱えておられるかたが、旅行を通じて仲間を作り、それが生きがいになっていることが分かった。人によって旅行の捉え方が違うこともあった。Bさん（本人）は、「旅行の非日常が良い。日常ではいろいろあるが、旅行先では忘れることができる。妻も非日常になるのでよいと思う。非日常が適当に欲しくなる。」Cさん「普段の生活では24時間介助者がいるわけではないので、旅行に来ているときの方が安心を感じられる。普段の訪問介護では、時間が来れば帰ってしまう。」旅行の時だけ味わえる安心感があるというのは大きな発見だった。

3. 総括

今回撮影した動画は、地域トラベルサポーター養成講座や大学の講義などでのみ使用し、一般に公開することはしないが、トラベルサポーターを志す人や、若い学生に、今回取材させていただいた方々の旅行への想いを知ってもらうことは、大変意義の大きいことであると考えている。

(4) 地域支援活動を広げる STEAM 教育

～モンテッソーリ教育実践の繋がりのなかから～

幼児教育保育学科 保田 恵莉

1. はじめに

今年度、学長裁量経費による地域に根差した研究活動の一つとして取り組んだ研究である。本研究では STEAM 教育の中でも特に Art アート芸術に着目し、地域支援活動を試みた。マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870-1952) により始められた乳幼児教育法「モンテッソーリ教育学」は、物理的環境に特徴がありモンテッソーリが考案した教具は「こども主体」で知育に優れていることで有名である。しかし、本研究では、学生の一人ひとりが人格形成に迫ることを目的に挙げ、モンテッソーリ教育学は自然の法則に従い、こどもが成長するための教育であることや人間を救う教育であることを念頭に教育実践を進めている。

2. 活動内容

支援連携施設: やまびこ園・教室 療育を求めるこどもが自分らしさを発揮できる基礎を養うために、遊びと生活を基本に個の発達を促す療育施設である。保護者の方々と子育てについて一緒に考えたり、保護者活動を通して仲間を作りを援助されている。専門演習 I・II の授業で前期・後期と観察及び研修でお世話になった。

施設での取組: 壁面制作や創作玩具がどのようにこどもの心を惹きつけるのか、調査を行う。学生たちが直接関わりを持ち、支援者となり支援を要するこどもに遊び(仕事)を提供することを試みた。手に取って扱う玩具は、こどもの感覚を養う玩具であること。また、支援児が抵抗なく自然体で使える玩具が開発できないものかなど、学生たちとリズムなども取り入れ、多角的に考えながら取組を深めていった。

研修会の様子 (小川施設長による講義)

エンジェルの活動 (花は誰のもの)



福祉の学び



幸福のトンネル

3. 終わりに

本研究を通し、地域連携の楽しさと同時に、こどもサイズである魅力的なモンテッソーリ教具の生活道具が支援に生かされること、こども自ら中心的課題となる人格形成を構築できることに学生が気付けたことを喜びに感じている。

3. 地域との連携による教育研究活動

(1) ひらのまつり 2022

生活学科 北川 志信・久保 晶路

1. はじめに

平野学区まちづくり協議会、琵琶湖畔利活用運営委員会主催のハロウィンイベントである「ひらのまつり 2022」。10月29日～30日の2日間、大津市におの浜なぎさ公園にて開催された。石井明教授の指導の下、ベーカリー塾の2回生が中心となり活動した。

2. 活動内容

「かぼちゃのシフォンケーキ」や「さつま芋のベーグル」など、季節の食材を使用した物や、「紅茶のクッキー」や「くるみのスノーボール」、「フロランタン」のような幅広い年齢層から人気のある焼き菓子、パンを含む計7種類出品した。

パンの販売は30日限りとし、当日の早朝から作業に取り掛かり、お客様に焼き立てのパンをお届けすることができた。

学生たちにとって初めての学外活動ということもあり、何を販売するか、どのような食材を使うのか等の話し合いが約2か月前から行われた。ポスターやプライスカードの作成では、商品の魅力が明瞭に伝わるよう、イラストを描くなどして工夫を凝らした。

3. まとめ

新型コロナウイルスの影響で、約3年間サークル活動が制限されていたが、待望であった学外販売の催しに参加する事ができた。自身が製造した物をお客様へお届けするまで、一貫して携わることは、滅多にできない経験である。2日間の販売であったが、両日ご来店くださった方や、同日に何度もご購入いただいた方が居られた。お客様からの嬉しいお声を直接いただいた学生たちは、喜びと達成感に満ち溢れていた。これは、対面での販売であるからこそ感じる事ができる魅力の1つではないかと思う。

昨今、製パンの活動を希望してベーカリー塾に入部する学生が見受けられるほど、製パンに強く関心を持つ学生が増加している。サークル活動の制限が解除され、多種多様な催しに参加できることを切に願う。

学生たちにとって忘れ難く、大変有意義な経験であっただろう。このような機会を与えて下さったイベント主催の皆様へ、深く感謝したい。



(2) ヘキセンハウスの制作

生活学科 北川 志信・久保 晶路

1. はじめに

平成 25 年度からびわ湖大津プリンスホテルより依頼されているヘキセンハウスの制作も今年度で 10 年目を迎え、今年度も石井明教授の指導の下、ベーカリー塾の 2 回生が中心となり活動した。

2. 活動内容

今年度は「一年に一度の忙しい日」をテーマに製作したヘキセンハウスは、12 月初旬からクリスマスまでの約 1 か月間ホテルのロビーに展示された。

小麦粉、砂糖、卵、バター、シナモンやバニラパウダーといったスパイス類を使用したパータ・ヘキセンハウスという生地を用いてヘキセンハウスを組み立てた。マジパンでサンタや動物などの登場人物を作り、アイシングでクリスマスツリーや家などを装飾した。高台に工場を設置し、トロッコでプレゼント等を運ぶ様子などを表現した。諸所に配置されたサンタや動物をよく見てみると、それぞれ細かいストーリーが作られており、見れば見るほど面白い作品に仕上がった。

学生がテーマを決め、イメージを膨らませながら制作し、完成させるまでに約 1 か月かかった。

毎年展示が好評なため、今年度も展示期間を延長し、12 月 26 日以降はお正月仕様に装飾を変え、1 月以降も展示された。

3. まとめ

先述したハロウィンイベントを終え、安心したのも束の間。気持ちを切り替え、すぐさまヘキセンハウス制作に取り掛かった。授業の空き時間を利用する学生や、材料を家に持ち帰って作業する姿が見られた。ホテルのロビーという目に留まりやすい場所に置かれる作品であるため、学生からは楽しさの中に、少しの緊張と責任を感じた。少ない部員数の上、過密日程であったが無事完成できたのは、このような計画性と協力があつてこそだと思う。思慮に思慮を重ねた結果、細部までストーリー性がある作品が出来上がった。その創造力と行動力を、今後も存分に活かしてくれるだろう。

学生たちにとって大変貴重な機会を与えてくださった、びわ湖大津プリンスホテルの方々から感謝したい。10 年間継続されてきた歴史のある活動が、今後も受け継がれていくことを願う。



4. 地域に向けた公開講座

(1) 守山すみれ講座

1) 楽しく作れるお菓子

生活学科 石井 明

1. はじめに

「楽しく作れるお菓子」はコロナ禍で出かけることが減少してしまう中、育児中の親御さん楽しんで子供と一緒に作れるような内容となるようにした。自宅でお菓子作りを通して、親子のコミュニケーションを深め、楽しんでもらえることを想定して行った。

2. 活動内容

家庭で気軽に作れるようにクッキー(シナモン、セサミ、ショコラ)を作った。シナモンは手で成形し、ほのかなシナモンの香るクッキーとした。セサミとショコラはクッキー作成では醍醐味の絞りでそれぞれに合った丸口金と星口金を使用して作成した。丸口金で絞るセサミはある程度丸に近い形に絞れば焼成中に丸く広がっていくので、想像より出来栄えが良くなるので喜んでもらった。星口金で絞るショコラは絞り目が残るクッキーで、絞りは難しいので大きさや形にこだわらずに楽しんで絞ってもらうようにした。3種類作成で時間は当初からギリギリだったが、人数が少なかったので何とか時間内に終わることができた。

3. 総括

開催場所が本学で守山からは距離があり、参加人数は少なめだった。今後開催場所は検討が必要と思われる。ただし、守山ではオープンや器具類などがなくメニューも検討する必要がある。参加された方々には喜んでいただけた。材料は手に入りやすく、家庭でも作ってもらえるようなお菓子を今後も紹介していきたい。



(1) 守山すみれ講座

2) ウェーブストレッチ

滋賀短期大学附属高等学校 副校長 木村 順子

1. はじめに

筆者は滋賀短期大学附属高等学校保健体育教員としての経験から「自分の体を知る」ことが大切であると考えている。体の軸やバランスを意識すること、身体を連動させてしなやかに動かすことを日々の生活では忘れてしまいがちではある。この講座では、ストレッチの前後で自分の感覚を確かめ、自分の身体の変化に気づくことをテーマとした。

2. 活動内容

令和4年8月21日(日)午前10時から、すみれホールにて開催した。参加者は、9名。

この講座で伝えたかったのは、アーチリメイクという考え方である。我々の身体には、足裏の他、腰部・頸部のみならず、膝裏、臀部、脇、体側など多くのアーチが存在し、それらのアーチが連動して動くことによりスムーズでしなやかな動きを引き出すことが出来る。ストレッチというと“伸ばす”というイメージが強いが、直線的に伸ばすというより、アーチを描きながら引き伸ばすことを意識させた。また、ストレッチ前(ビフォー)とストレッチ後(アフター)の感じ方を確かめることを意識した。

①片足立ちでのバランス・ゆがみやふらつきは、潜在的能力により改善しようとするが、それが原因で“疲れ”を引き起こす。足裏のアーチをリメイクすることでバランスが良くなり、動きをしなやかに連動させることが出来る。

②股関節骨盤周りのアーチリメイク・正しい位置に骨盤があることで姿勢が良くなり、下半身と上半身のスムーズな連動を引き出せる。

③脊柱のアーチリメイク・脊柱起立筋へのアプローチにより血流の改善が期待できる。脊柱を正しいS字カーブにリメイクすることで姿勢改善を行える。脊柱上部のリメイクは、呼吸改善にも役立つ。

④さする、揺らす、ほぐすなど、セルフマッサージを施すことで心地よい癒しを体感することが出来る。

3. 総括

参加者は自分の身体への関心度が高く、私の話に興味を持って耳を傾けられ、理論的にストレッチの効果を知ることができたことにより、ビフォー・アフターで、その違いに対する納得感も得られたようであった。

自分の身体の声を感じ、ストレッチやマッサージを施すことで得られる心地よさを伝えられたと思う。日常生活の中でセルフストレッチ・マッサージを取り入れてもらえることを期待する。

このような機会を与えていただいたことに感謝します。

(1) 守山すみれ講座

3) からだと病気のしくみ

ビジネスコミュニケーション学科 田中 裕之

1. はじめに

2022年10月9日(10:00-12:00), すみれ保育園(滋賀県守山市)において「からだと病気のしくみ」という題目で講演した。講演では, 新型コロナウイルス(COVID-19)の話題を中心に, 医学的なトピックスを解説した。配布資料にもとづき, パワーポイントを使って図や表を提示した。

2. 講演内容

(1) ウイルスとは何者か

ウイルスは, 人間の細胞よりずっと小さく, 肉眼では見えない。まず, ウイルスの大きさや物質的な特徴について説明した。ウイルスは, DNAもしくはRNAがタンパク質や脂質の殻の中に入ったもので, 単なる物質的な粒子である。ウイルスは自ら移動する能力はもたないため, 特定の場所に集まることはない。したがって, 集まるとしたら, 人間が体内で培養したものを, 人間が運んだ結果である。ウイルスで汚染されやすい公共の場所や物について, クイズ形式で考えていただいた。

(2) 新型コロナウイルスに感染するまで

ウイルスに感染し, 発症するまでを概説した。新型コロナの感染者は, 世界ですでに数億人にのぼっている。私たちヒトの細胞にはこのウイルスが感染しやすいよう, あらかじめ受容体(レセプター)が用意されていた。ウイルスが細胞に付着・侵入したあと, 複製して増殖するメカニズムについて説明した。また, これほどまでに速いサイクルで変異株が出現するしくみを解説した。

(3) 新型コロナウイルスに対する医療体制

新型コロナ感染症に対して医療機関でおこなわれている各種の検査など, 我が国の医療戦略について概説した。PCR検査, 抗原検査や抗体検査の目的の違いについて, またCT画像検査でわかることについて説明した。今回, 感染制御の切り札として登場した, メッセンジャーRNA(mRNA)ワクチンについて, その開発経緯も含めて解説した。

3. まとめ

この講座は, 依然として新型コロナ感染症問題の収束が見通せていないものの, いくぶん社会が落ち着きを取り戻したさなかに開催された。問題が発生し始めた約3年前に時計を戻すと, このような地球規模の大事態が続くことは, 想像しづらいことであつた。今回, 感染者数が数億人規模で世界的に広がったのは, グローバル化が進み, 人間が互いに往き来し, 接触するサイクルが激増した当然の帰結ともいわれる。参加者の方々とは, 本講座で, コロナ問題が問いかけたものは何であるのかについて, 少し大きな視点から, あらためて考える時間を共有できたと期待する。

(1) 守山すみれ講座

4) 身体で感じ、身体で表す

～幼児期における感性の育みを促す

＜身体・造形・音楽＞の融合的表現～

幼児教育保育学科 北尾 岳夫・深尾 秀一・柚木たまみ・三上 佳子
奈良教育大学 教授 竹内 晋平

1. はじめに

この講座は、全5回開催の4回目として、令和4年11月27日（日）に本学附属すみれ保育園のすみれホールを会場に開催された。参加募集対象者は、その内容から現任保育者や子育て世代の方々とした。また、本学幼児教育保育学科の教員4名と奈良教育大学の竹内教授による研究プロジェクトチームが日本学術振興会の科学研究費助成（課題番号：21K02509）を受けていることから、その研究成果の中間発表として位置付けての開催でもあった。

2. 活動内容

我々研究プロジェクトチームは、『幼児期における感性の育みを促す＜身体・造形・音楽＞の融合的表現に関する基礎的研究』という研究課題名で、令和3年度から3カ年の計画で研究に取り組んできている。その目的は、幼児の感性を育むとともに対象・事象の認識や思考力を育成する身体・造形・音楽の融合による表現活動のあり方を解明し、保育者研修等に資する教材の開発をすることにある。今回の講座では、これまでのプロジェクトチームによる研究成果を発表するとともに、参加者の皆様と造形・音楽・身体の融合的な表現活動について共に考え、実践活動についての意見交換を行うことで、今後の研究の方向性についても検討を進めたいと考えた。当日は11名の皆様にご参加をいただき、前半約60分でこれまでの研究成果発表と質疑応答を行い、後半約60分は幼児の身体・造形・音楽表現とそこにみられる身体性について、パネルディスカッション形式でご参加の皆さんと意見交換を行うことができた。

3. まとめ

この研究プロジェクトは、幼児期の身体表現はもちろんのこと、造形表現、音楽表現の根底にも身体性があり、各論的に扱われがちなこれら3つの表現活動について、身体性に焦点を当てて理解を進めるということをコンセプトにしている。意見交換の場で、保育現場の皆様も同様の感覚で子どもたちの表現活動を見ておられることを確認することができた。いただいたご意見を活かし、今後、さらに研究内容を深めていきたい。



(1) 守山すみれ講座

5) 街道と宿場町

学長 秋山 元秀

1. 宿場町が生まれるまで—守山宿から—

守山宿は江戸時代の中山道の江戸から数えて 67 番目の宿場であり、次の草津宿からは東海道と同じ道を行くので、中山道単独では最後の宿場であった。しかし守山が東西日本を結ぶ幹線路において重要な役割を果たす集落として登場するのはもっと古い。早くは平安時代末期、平治元年(1159)の平治の乱に際して東国に落ちようとする源義朝一行からはぐれた頼朝が「森山の宿」に入ったところ、宿の沙汰人から捕えられようとしたという記事が『平治物語』にみえる。

古代の東西交通は、東海道と東山道という 2 道があったが、鎌倉時代になると東海道を尾張の熱田まで来て、伊勢の鈴鹿峠へ向かわずに、濃尾平野を縦断して美濃へ至って東山道に入り、不破関を越えて近江を南下するルートの主たる東西交通路として利用した。それに沿う柏原や野路、篠原、鏡、武佐などが宿場の機能をもつ集落として登場する。守山もその一つであった。中世に旅行した人々が残した日記や旅行記にその様子が描かれている。

2. 中山道と宿場の成立

近世になり江戸を中心にした五街道が整備されると、古代の東山道は一部ルートを変えながらも、本州の内陸部を通って江戸と京都を結ぶ中山道として東海道と並ぶ幹線路となる。美濃から信濃に至るルートとしては木曾を通るため、木曾路とも呼ばれた。近江の部分では、関が原を越えてから、柏原、醒井、番場、鳥居本、高宮、愛知川、武佐の 7 宿を経て守山宿に至った。中世末から近世初に生まれた湖岸に近い彦根や八幡の町場は経由せず、湖東の平野を縦断したが、宿場はそれぞれの地域の小規模な中心集落であった。近代になって幹線交通路にならなかった部分が多く、歴史的な景観がよく残り観光資源になっているところも多い。

中山道は東海道に比べれば通行量も少なく、公的な取り扱いも低かったが、一方、東海道の険難な峠道や不安定な川渡りを嫌う女性旅客に好まれたり、縁起を担ぐ宮家公家の将軍家への降嫁に際して使われたりした。また新茶を江戸へ運ぶ茶壺道中も中山道を選んだ。

3. 宿場の風景—守山宿—

守山が正式に宿駅として認められたのは信長の時であるが、江戸時代には近江を代表する宿場の一つとなる。京都を発って中山道をゆく旅客は守山を最初の宿泊地とするケースが多く、旅籠の数も近江の宿では草津に次いで多かった。守山は、東に隣接する吉身村と西に繋がる今宿村の 2 村を加宿として、3 集落を合わせて一つの宿であった。往還筋は 11 町余(1.3 km)もあり、近江の中山道の宿では最も長い。周辺の農村域に対して中心機能をもつ町場として商業や手工業も発達し、東門院をはじめとする古寺社も多く、現在も街道とそれに沿う古い民家の家並みがよく残っており、歴史的景観を味わうことができる。

(2) 公開講座

1) 子どもプログラミング教室

滋賀短期大学附属高等学校 教諭 杉本 侃哉

1. はじめに

2020 年度、小学校におけるプログラミング教育の必修化に始まり、2021 年度は中学校、2022 年度には高等学校におけるプログラミング教育が必修化となった。その背景として、情報化やグローバル化により社会が大きく変化していく中で、人工知能 AI などの技術革新に伴い、将来、今ある仕事の半数近くが自動化されるという予想がされている。このように変化が激しい社会を生き抜くために、プログラミングを学び、プログラミング的思考を育成し、コンピュータを課題解決に活用できるようにすることが目的とされている。プログラミング的思考というのは、九九を暗記することと同じように、プログラミング言語を覚えて将来のプログラマーを育てることだけではない。ここでいうプログラミング的思考というのは、自他の人生や生活を豊かなものにするために、地域課題や身近な生活上の課題を自分なりに論理的・創造的に考え解決していく力である。

2. 活動内容

今回の活動内容は、障害物をよけながらゴールまで進むように、車を走らせるプログラミングを組んでもらった。これは、上記で述べた「プログラミング的思考」を身につけるための導入部分であると考えている。プログラミング的思考が身につけていなければ、コンピュータがどれだけ便利であったとしても、コンピュータに自分の意志を伝えることができないため、効率的な課題解決にはならない。そのため、本講座ではプログラミングを楽しみと感ずることができるよう、言語を覚えることを重視するのではなく、パズル感覚でプログラミングを楽しむことができる教材を選択した。プログラミングは答えが1つではなく何通りもの書き方が存在する。要するに、正解・不正解があるわけではない。周りの人と違っていいんだ、という意識を持ってもらうことが大切である。今回は子どもたちが書いたプログラミングを否定するのではなく、最大限それを生かすことができるように助言を行った結果、周りのグループと自分のグループを比較したりすることなく、集中して自分のチームのプログラミングに取り組んでくれた。

3. 総括

今回この講座を開催するにあたって、今の小学生のプログラミングに対する知識を図り切れていない部分があった。ただし、それはいい意味で裏切られたように感じている。私自身が小学生のときには、プログラミングという言葉すら聞いたことがなかったが、今の小学生は自分の家でプログラミングに取り組んでいる子もいた。プログラミングの授業が必修化されたことに伴い、明らかにプログラミングに対する意識や技術も向上しているように感じた。これからも続けていくことで、より向上していくのではないかと考えており、これからどのような生徒が小学校・中学校を経て、高等学校に入学してくるのがとても楽しみになった。

(2) 公開講座

2) お菓子の講座

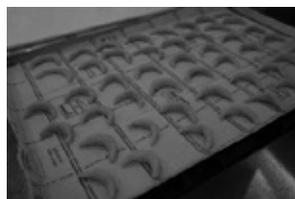
生活学科 石井 明

1. はじめに

令和4年9月7日(水)と9月14日(水)に一般対象で楽しく作れるお菓子「オーストリアのお菓子」を同じ内容で開催した。グループワークでコミュニケーションを取りながら参加者の皆さんが楽しく過ごしてもらえたようにした。

2. 活動内容

オーストリアの伝統菓子であるリンツァートルテとキプフェルを作った。リンツァートルテはスパイスが入った生地で好みがあるが、日本人でも食べやすいように調整をした。生地を絞る作業は1人ずつ行い、作る満足感を得られるようにした。キプフェルの成形は手で行い、こちらも1人ずつで成形し、形や表情に個性が出るようにした。焼成時間にフランス、ドイツ、スイスのクリスマスマーケットを紹介した。



3. 統括

コロナ禍で2年間開催できなかったのが、今回開催出来て参加された方は喜んでいただけただけで嬉しく思う。焼成時間に4年前に行ったクリスマスマーケットを紹介し、海外旅行が出来ない状況だったので、旅行に行った気分にもなれたと言ってもらえ、紹介して良かった。伝統菓子は各国で沢山あるので今後もお菓子の講座を通して伝えていきたい。



5. 大学及び自治体との連携事業

(1) 地域移動講座

1) 地域移動講座 in 長浜

幼児教育保育学科 松村 都子

1. はじめに

令和4年8月9日(火)長浜市役所高月支所において、長浜市教育センター「自己啓発研修 園小連携講座」と連携し、滋賀短期大学地域移動講座 in 長浜を開催した。「今、改めて幼小接続を考える」をテーマに講演した。8月4日の大雨による高時川の氾濫で道路冠水や住屋被害への対応の中にありながら、幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所から約30名の先生方が参加者して下さった。

2. 講演内容

3法令(幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育養育要領・保育所保育指針)の改定(改訂)の理解から、改めて幼小接続を考え、保育の質を支える保育を語る力と幼保小架け橋プログラムについて、次の通り、教材の研究(演習)を組み入れ講演した。

(1) 3法令の改定(改訂)に至る変遷を次の3点から読み解く

- ・幼児教育が経済効果を期待されている背景と少子化、児童福祉の量の拡大
- ・すべての子どもへ同等の質の高い幼児教育を提供することと義務教育の基礎を担う
- ・幼稚園、認定こども園、保育所の役割

(2) 「育みたい3つの資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について

- ・乳幼児保育から高等教育までの一貫性が示された「育みたい3つの資質・能力」を学びのプロセスから考える
- ・幼児教育の目標は到達ではなく方向性としながらも指標「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示されたことをどう理解し、活用するかを考える

(3) 保育の質を支えるもの

- ・教材の研究(遊びの内容の分析)[演習]
(「草花の色であそぼう」を3つの資質能力、10の姿から考える)
- ・保育を語る力(保育者の質)

(4) 保幼小架け橋プログラム・令和の日本型学校教育について(文部科学省資料より)

3. まとめ

要領や指針の変遷の理解が、これからの保育現場に求められていることの理解につながり、保育を語る力(伝える力)となり、結果的に確かな幼小の接続となる。今回の講座では、小学校の先生方の参加はなく残念ではあったが、幼小接続が幼小の互恵性によってそれぞれの教育の質の向上につながるものとなるよう、今後も保幼小接続について学び、地域へ発信をしていきたい。

(1) 地域移動講座

2) 地域移動講座 in 大津

幼児教育保育学科 松村 都子

1. はじめに

令和5年1月19日(木)大津市役所において、大津市保育協議会の大津市公私立代表者部会と連携し、保育者人材育成に向け「これからの保育を担う～“伝え合う”“継承する”を考える～」をテーマに、大津市内の公私立保育所や認定こども園の中間管理職や管理職約60名を対象に、地域移動講座 in 大津を開催した。

2. 講演内容

近年、保育現場は大きな時代の変化の中にあり、翻弄され混沌とした悩みがあることを理解しているが、これまでの保育の意義や誇りといったものを支えに惑うことなく、この時代を乗り越えたい思いをもち講義を行った。

まず、保育所保育の変遷の理解から、今回保育所保育指針が大きく改定・法令化されたことの意味や保育所や認定こども園が担う役割について再認識した。そのうえで、保育内容の再検討の必要性を提示しながら実際の保育実践をどう考え捉えていくかを問題提起し、育てたい保育者像を明らかにした。

“伝え合う”“継承する”を考えると、伝える側の送信力を問う以前に、伝えたい・継承したい内容の具体が必要である。保育所保育の改定に寄せて、管理職自身がこれまでの保育経験を礎に、「これからの保育」についてそれぞれの保育理念をもつことで、伝えたいこと、継承したいことが明確になることをお伝えした。

また、事前アンケートに伝え方の方法についての悩みや迷いが多くあったことを受け、保育者の日頃の子どもの関わりや保育所指針の総則「保育所保育に関する基本原則 保育の目標」の中にもヒントがあり、これからの保育を担う保育者の伴走者としての姿勢やあり方について述べた。

3. まとめ

事前に受け取った「人材育成における課題」についてのアンケートには、各園の課題や悩み、取り組みの内容等が数枚にわたり記載されており、保育士不足の中、多様な働き方の保業者を受け入れ育成に尽力されていることを実感した。「伝わらない」「共有できない」という歯がゆさから早急に「効果的な方法を知りたい」という思いもあった一方で、日々の園の取り組み紹介の中に大いに参考となる対応策や改善策等も多々あり、さすが子どもの育ちを助長することを生業とする方々の取り組みだと思わされた。

保育や保育者の質を問われながら保育士不足の対応に日進している現場のご苦勞に、少しでも役立つことができたなら幸いである。

6. 高大連携事業

(1) 滋賀県教育委員会の連続講座 (2022年8月)

- 1) 2022年8月3日 10:30~12:10 滋賀短期大学
1日の消費するエネルギーについて考える 灰藤友理子 (滋賀短期大学助教)
- 2) 2022年8月3日 13:20~15:00 滋賀短期大学
幼児教育の基本を学ぼう~遊びの中の学びって?~
久米央也 (滋賀短期大学教授)
- 3) 2022年8月3日 13:20~15:00 滋賀短期大学
臨床検査と医療費 沖山圭子 (滋賀短期大学教授)
田中裕之 (滋賀短期大学教授)
- 4) 2022年8月3日 13:20~15:00 滋賀短期大学
プロジェクトマップの仕組み 小笠原寛夫 (滋賀短期大学講師)

(2) 滋賀県等の高等学校への出前授業 (2022年1月~2022年12月)

- 1) 2022年1月20日 長浜北高校
食と健康について考える 灰藤友理子 (滋賀短期大学助教)
- 2) 2022年2月14日 長浜農業高校
本物のいくらと人工いくらの見比べ 原 知子 (滋賀短期大学非常勤講師)
- 3) 2022年2月14日 長浜農業高校
チョコレートの制作 石井 明 (滋賀短期大学教授)
- 4) 2022年3月16日 湖南農業高校
紙から広がる造形の世界 深尾秀一 (滋賀短期大学教授)
- 5) 2022年6月13日 大阪緑涼高校
進路選択・面接指導講演 沖山圭子 (滋賀短期大学教授)
- 6) 2022年7月8日 石部高校
子どもと造形あそび 深尾秀一 (滋賀短期大学教授)
- 7) 2022年7月8日 石部高校
ホスピタリティについて 沖山圭子 (滋賀短期大学教授)
- 8) 2022年7月8日 石部高校
食を通して世界を学ぶ 中平真由巳 (滋賀短期大学教授)
- 9) 2022年7月11日 八幡商業高校
食と健康を考える 灰藤友理子 (滋賀短期大学助教)

-
- 10) 2022年9月15日 玉川高校
栄養素ってなんだろう？ 清水まゆみ（滋賀短期大学特別教授）
 - 11) 2022年9月22日 伊吹高校
世界の食と文化 中平真由巳（滋賀短期大学教授）
 - 12) 2022年9月27日 大津高校
子どもの発達と保育 柚木たまみ（滋賀短期大学教授）
 - 13) 2022年10月6日 大津高校
乳幼児のための音あそび 松井典子（滋賀短期大学准教授）
 - 14) 2022年10月26日 守山北高校
子どもの育ちと音・音楽 柚木たまみ（滋賀短期大学教授）
 - 15) 2022年12月9日 栗東高校
モノやサービスの売り方～今までとこれから～ 江見和明（滋賀短期大学教授）
 - 16) 2022年12月9日 栗東高校
金融機関の仕事について～銀行での勤務経験をもとに～ 江見和明（滋賀短期大学教授）
 - 17) 2022年12月9日 栗東高校
幼児教育・保育を学ぶ 三上佳子（滋賀短期大学准教授）
 - 18) 2022年12月14日 八幡高校
食を通して世界を学ぶ 中平真由巳（滋賀短期大学教授）
 - 19) 2022年12月16日 国際情報高校
飲み込む力について考えよう 豊岡真莉（滋賀短期大学特任助教）

(3) 大学見学受け入れ時の講座（2022年1月～2022年12月）

- 1) 2022年7月13日 堅田高校
今すぐいかせるビジネスマナー 若生真理子（滋賀短期大学特別准教授）
 - 2) 2022年9月22日 彦根総合高校
ビジネスマナーを身につけよう 若生真理子（滋賀短期大学特別准教授）
 - 3) 2022年11月9日 北大津高校
幼児教育の基本を学ぼう～遊びを通して学ぶ子どもたち～
久米央也（滋賀短期大学教授）
 - 4) 2022年11月24日 滋賀短期大学附属高校
体も心もあたたまる「じゃがいもとアンチョビのグラタン」を作しましょう
中平真由巳（滋賀短期大学教授）
-

-
- 5) 2022年11月24日 滋賀短期大学附属高校
ココナッツ入りのサブレを絞って焼き上げてみましょう
石井 明 (滋賀短期大学教授)
 - 6) 2022年11月24日 滋賀短期大学附属高校
子どもの成長と音・音楽 柚木たまみ (滋賀短期大学教授)
 - 7) 2022年11月24日 滋賀短期大学附属高校
クリニックの受付 沖山圭子 (滋賀短期大学教授)
 - 8) 2022年11月24日 滋賀短期大学附属高校
ハンドメイド雑貨を作ろう 河村梨花 (滋賀短期大学特任講師)
 - 9) 2022年12月16日 栗東高校
幼児教育・保育を学ぶ 三上佳子 (滋賀短期大学准教授)

2022年4月3日(日) 中日新聞(滋賀版)

将来への希望を胸に 第一歩 滋賀短大入学式



入学式に臨む学生ら＝大津市竜が丘の滋賀短大で

大津 滋賀短期大(大津市竜が丘)で2日、入学式があり、新設されたデジタルライフビジネス学科の十九人を含む二百六十八人が大学生活の第一歩を踏み出した。新型コロナウイルス感染症拡大を受け、式典は昨年に続き新入生のみ参加とし、保護者には動画投稿サイト「YouTube」で生配信した。秋山元秀学長は「何事も具体的な物事から始め、どう役に立つかという観点から考えてほしい」と呼び掛けた。新設のデジタルライフビジネス学科では、仕事や生活に生かせるデジタル技術を学ぶ。関係係数や回帰分析といったデータサイエンスの基本的な知識だけでなく、インターネット上

でのデザインやプログラミングの作成方法、動画の発信方法なども身に付ける。同科に入学した吉広美佑さん(心)はウェブデザイナーを目指し、「プログラミングなどデジタルの基礎から学び、将来の選択肢の幅を広げていきたい」と意気込んでいた。(山村俊輔)

2022年4月3日(日) 読売新聞(滋賀版)

デジタル人材 未来育む

滋賀短大入学式 新学科に19人

大津市竜が丘の滋賀短期大で2日、入学式があり、266人が新たなスタートを切った。「デジタルライフビジネス学科」が新設され、秋山元秀学長は「スマホを自由自在に使える世代でしようが、ノートパソコンにも習熟し、デジタル化に対応した専門性を身に付ける。高度専門人材育成のための文部科学省の補助金を全国一の短大で唯一獲得。衣と住に関わるものづくりとデジタルの実務に強い人材を育てる。新学科は19人(男性6人、女性13人)で、ベトナムとミャンマーからの留学生も在籍。東近江市の吉広美佑さん(18)は「デザインの基礎やカラーコーディネートなどを学びたい。将来は広告業界に進み、ウェブデザイナーになれる」と夢を語った。小山内幸治学長は「コミュニケーション論

や最新技術を学び、中小企業の現場で不足するデジタル人材として幅広く活躍してほしい」と期待を寄せていた。

大津市の魅力をピーアール

びわ湖大津観光大使に任命

滋賀短期大学

滋賀短期大学（滋賀県大津市）は、昭和45年に開学し、豊かな教養と実践的な専門の知識、そして技術を培い、デジタル化社会を迎える新時代において社会の発展と文化の向上に貢献する人材の育成を目指している。

このたび、同短大の生活学科食健康コースに所属する1年次の吉田希梨花さん（滋賀県立大津商業高等学校出身）が厳正な選考を経て「令和4年度びわ湖大津観光大使」に選任された。

これは、公益社団法人びわ湖大津観光協会（本部・同主催のもと、「びわ湖大津」のさらなるイメージアップを図るために、ボランティア精神を持って大津市や滋賀県



大津市の顔として市のピーアール活動に邁進する吉田希梨花さん

内・外の観光キャンペーン・観光イベントなどに積極的に参加し、びわ湖大津の観光宣伝を促進する観光大使を募ったもの。筆記試験および面接選考を含めた選考会は1月29日、選任式は3月18日に行われ、吉田さんは「令和4年度びわ湖大津観光大使」に見事選任された。

今回の選任について吉田さんは「念願だった観光大使に選んでいただき、とても嬉しい気持ちでいっぱいです。これから大津の顔としての自覚と責任を持ち、精一杯務めてまいりますので応援のほどよろしくお願いします」と、自信に満ちあふれた表情でコメントした。任期は令和4年4月1日から令和5年3月31日までの1年間。吉田さんは、大津市の顔として同市のピーアールおよびイメージアップを図るべく、学業と両立させながら積極的に活動していくという。

そして、栄養士や栄養教諭としての専門知識・技術を習得し、健康づくりに貢献できる人材となるだろう。

2022年4月15日 No.1427 広報おおつ

びわ湖大津観光大使が
選任されました

大津市の顔として観光宣伝の一翼を担う「令和4年度びわ湖大津観光大使」に山田 亜沙陽さん（写真左）、吉田 希梨花さん（写真右）が選ばれ、選任されました。

2人は「大河ドラマや直木賞受賞作の舞台にもなる歴史深い大津。びわ湖をはじめ自然の美しい景観や豊富なアクティビティも兼ね備える“大津”の魅力を、老若男女問わずより多くの方へ伝えていきたい。」と抱負を語っていました。

任期は令和4年4月1日から1年間で、大津のPRとイメージアップのために活躍していただきます。



びわ湖大津観光協会 ☎528-2772

将来の進路見据え 県立高校生講義体験

滋賀短大

県立高校の生徒を対象に
大学での講義を体験する講
座が三日、滋賀短大（大津
市竜が丘）で開かれた。一
く三年生計約六十人が、栄
養学や幼児教育など四分野
に分かれ、将来の進路を見



生活行動でのエネルギー
消費を学ぶ高校生ら＝大
津市竜が丘の滋賀短大で

据えながら参加した。

栄養士や製菓衛生師を目
指す生活学科の講義では、
栄養学の前提となる食事や
生活行動で消費するエネル
ギーについて学習した。灰
藤友理子助教（三）から「人
は生きているだけで多くの
量のエネルギーを使ってい
る」と説明を受けながら、
短大生の一日の動きを基に
したエネルギー消費量の計
算を実践した。

高島高一年の山室結愛さ
ん（二）は「高校での保健体
育の授業で知った体格指数
（BMI）の使われ方など
を、興味深く学べた。進路

の選択肢が増えた」と話し
た。

灰藤助教は「専門分野の
講義を実感できるよう、内
容をあえて簡単にしなかつ
た。栄養学はおいしい食事
を提供するだけでなく、人
体に関する知識も必要なこ
とを知ってもらえたら」と
期待した。

高校生対象の講義は、発
展的な学習の機会の確保や
進路選択に役立ててもらお
うと、県教委が二〇〇四年
から実施。本年度は高校が
夏休みの七月下旬から八月
にかけて、県内計十大学が受
け入れる。（北村太一）

滋賀短期大学 観光ツアー演習にて地域の理解や ホスピタリティ精神を学ぶ

8月26日、ビジネスコミュニケーション学科の学生11名が「おもしろ観光ツアー演習」の実習を行った。この授業の講師は、日本旅行カリスマ添乗員ともよばれる平田進也氏。

観光バスで大津駅を出発し、長浜黒壁スクエアでの散策や近江八幡・八幡山ロープウェイを周る日帰り旅行をする中で、身体の不自由な方を案内するという新しい学びも加えられた。事前指導の中では、同講師がこれまでに実施した「介護する人を癒す・解放ツアー」についての講義をし、最初の目的地、黒壁スクエアでは車椅子介助を実地体験。学生たちにとって、地域の理解だけでなく、ホスピタリティ精神あふれる気遣いやおもてなし等、さまざまなことを学べるとも貴重な1日となった。

(参照:滋賀短期大学HPほか)

地域連携年報 第九号

令和5年3月31日

滋賀短期大学 地域連携教育研究センター

〒520-0803 大津市竜が丘24-4

TEL 077-524-3605 FAX 077-523-5124

SUMiRE